

建国以来の人間性をめぐる論争の状況

白 燐 編
杉本達夫訳

〔訳者まえがき〕

文学は人間学であるというが、その人間をどうとらえるか、とくに階級社会における人間存在をどう認識するかという「人間性問題」は、革命文学ないし社会主義文学の重要な論点である。しかしながら、本文にも整理されているように、解放後の中国では、人間性論議が政治運動に呑みこまれ、とくに文革期には、「人間性」ということば自体が「ブルジョア人間性」あるいは「超階級的人間性」と同義に扱われて、批判の対象でしかなかった。「人間性」のイメージが右派とか修正主義と結びつくにいたったについては、革命後の政治風土の中で、毛沢東の『文芸講話』がきびしく解釈され、かつ絶対の指針として機能したことにも大きな原因があろう。「四人組」失脚後、人間性研究のタブーが解け、各地の研究誌、文芸誌に多くの論文が発表されるようになった。とくに文革期の、硬直した理論によって荒廃した文芸を蘇生させるべく、人物創造の枷となる「人間性論」を打破すべく、創造の基礎となる人間をどうとらえるかの問題を、いまあらためて再検討しはじめたということであろうか。理論の深化前進のためには、制約のない研究が望ましく、『文芸講話』をも含めて過去の理論への総点検がなされるべきである。もっとも、理論研究は創作と分かちがたく結びついて、実践的意味をもつ。社会主義擁護、政治への奉仕という大前提のもとでは、当然ながら政治的限界があろう。

本文はここ数年来の人間性をめぐる論議の争点を整理したものである。この論議は編者白燐もいうとおりまだ緒についたばかりの段階であって、今後の発展の方向は見定めがたいが、「階級性」だけに縛られない見解が力をもってきていることは見てとれよう。さらには、こういう論議自体が思想解放の一表現であり、文学界、学術界における自由化の一環であるといえるだろう。

本文は資料的性質のものであるから、訳出に当って、作品や論文の題名は原題名をそのまま記した。ただし、マルクス、エンゲルス、毛沢東、魯迅のそれについては、ひろく知られた邦訳題名を記した。また、マルクス・エンゲルスの著作からの引用は、邦訳を参照しつつ、引用の中国文に即して訳した。

概略的説明

建国以来の、人間性問題をめぐる論争は、二つの時期に分けて考察することができる。ひとつは五十年代から「文化大革命」までの時期、ひとつは「四人組」打倒以来の数年間である。

五十年代の初め、ごく一部の著書や論文で人間性をめぐる問題が提起されたが、一般的な言及に止まっていたため、文学芸術界や学術界の広汎な注目をひくこともなく、論議を呼ぶこともなかった。

わが国の学術界で、最初に人間性問題をはっきり提起し、かつ比較的掘り下げて論述を進めたの

は、《新港》1957年1月号に発表された巴人同志の論文《論人情》であった。

巴人同志の論文に続いて、徐中玉、錢谷融、徐懋庸、王淑明同志たちが相次いで論文を発表し、人間性問題および文学芸術と人間性との関係の問題等について見解を述べた。馮雪峰、何其芳等の同志たちも、異なった角度から人間性をめぐる問題に言及した。これらの同志の論述や意見は、人びとを啓発して問題を考えさせるうえに一定の役割を果たした。だが、この時の論議はほどなく一方的な政治的批判によって押しつぶされてしまった。

1960年、当時の内外政治情勢の影響のもとで、文学芸術界、学術界では修正主義批判を展開するとともに、あわせて「人間性論」批判運動をも展開した。巴人同志たちの人間性問題に関する観点は批判資料としてあらためて提示され、かつ、何らの分析も加えることなく「人間性論」として排斥された。その際、王淑明同志は自己の見解への弁明を趣旨とする《關於人性問題的筆記》を発表した（《文学評論》1960年第3期）。時の《文学評論》はこの論文を発表するに際し、明らかに否定的な論調による編者前言を加えた。この論文は発表されるなり、さらに激しい批判を招き、以来、人間性問題は論議を継続すべくもなくなったのである。

1964年前後、文学芸術界で一部の文学芸術作品の功罪得失について論評した際、人間性問題にも話は及んだ。少なからぬ論文が具体的作品（たとえば映画《早春二月》、《北国江南》、映画シナリオ《無情的情人》、小説《党費》、《三月雪》）に結びつけて、かなり長期にわたる「人間性論」批判を行なったのである。

林彪・江青一派が横暴をきわめた十年の動乱期には、人間性問題は単に「あらゆる反革命修正主義路線の理論的基礎」と誣いられたばかりか、人間性論批判が、かれらが反革命の政治的陰謀をめぐらすための重要な手段に仕立てあげられた。

「四人組」が倒されて後、政治上の民主的雰囲気はもどり、強まるにしたがい、また人びとが林彪・「四人組」による封建ファシズムの野獸的残虐さを肌身にしみて悟るにしたがい、学術界であらためて人間性問題が提起されるにいたった。

1977年9月、《人民文学》は何其芳同志の《毛沢東之歌》を発表して、「共通の美」問題に関する毛沢東同志の論述を初めて明らかにした。人間性問題と密接につながるこの問題が提起されて、全国の文学芸術界、学術界に大きな反響を呼びおこし、その後、「実践は真理を検証する基準である」問題をめぐって全国で熱っぽい論議が展開されるにともない、また周恩来同志の《在文学工作座談会和故事片創作會議上的講話》が発表されるにともなって、人間性問題をめぐる論議があらためて始められた。多くの新聞雑誌に人間性問題を論じる文章が続々と掲載されて、人間性論議は全国的な熱っぽい論議の様相を呈するにいたった。不完全な統計によると、1979年1月から1980年9月までに、人間性問題をめぐる論文が、各地の二十余种の新聞雑誌に七十篇近くも発表されている。

総括的に見るなら、「文化大革命」前の「人間性」問題をめぐる論争は、基本的には人間性問題は提起することが許されるか、語ることが許されるかという水準にとどまっていた。それは当然ながら、広汎な文学芸術工作者や理論工作者の問題ではなく、その時期の特定の歴史的条件のせいである。ここ数年来の人間性問題をめぐる新たな論議は、現在の時点で見れば、論文や提起された問題が数多くて、論議が次第に深まっているばかりでなく、さらには、異なった観点からする論争がいずれも「百花齊放、百家争鳴」の正常な雰囲気の中で進めうるようになっている。当面、人間性問題をめぐる論争はまだ始まったばかりの段階にあるが、思想解放がさらに深められ、「百花齊放、百家争鳴」方針が正しく進められるにともなって、この論議がかならず健全な方向に深められてゆき、

わが国の人間性理論の研究と構築に応分の貢献をするであろうことは疑いない。

一．五十年代から六十年代の論争

1. 人間性とは何か

ある意見はこう考える。人間性（あるいは人間的性情〔原文は「人情」〕。かりにこの訳語を当てたが、人間の自然的存在からくる思想感情と、社会的存在からくる思想感情を含む、まるごとの人間をとらえた概念として理解されたい）とは、「人間と人間との間に共通するものである。飲食、男女、これは人間が共通して求めるものである。花の香り、鳥のさえずり、これは人間が共通して好むものである。一に生存を求め、二に衣食足りた生活を求め、三に発展を求めること、これは通常の人間に共通する望みである。もしこの社会にこれら通常の人間が求め、好み、望むところを阻んだり妨げたりする者がいるなら、かならず起って抗い戦う者がいるはずである。これら求め、好み、望むことは、人類の本性から出たと言てよい」と。⁽¹⁾

またある意見の主張するところでは、人類には「共通の一般的人間性」が存在している。すなわち労働、親子の愛、両性の愛および生を楽しむ死をにくむこと等である。階級社会にあっては、階級によって人間性を絶滅させられた少数の搾取者を除いて、一般の人びとは、いずれも自らの労働、誠実な愛、健康な生活を追求しているのである。⁽²⁾

もうひとつの意見の主張するところでは、人間性とは「人間の日常生活に現われた思想感情、習性、心理等の特長を指している」のであり、「人類の本性は向上を目指すものであり、すばらしい生活、人間が人間を圧迫することも搾取することもない生活を望むものである」。⁽³⁾

さらに別の意見の主張するところでは、人間に

は自然属性と社会属性の両面がそなわっている。生物としてみれば、人間には飲食男女のように生まれつきの自然本能がそなわっている。一方、思想感情、倫理観念、生活習慣等の諸側面に現われた人間の本性は、社会的産物でしかありえない。労働が人間を動物状態からひきはなして、社会的人間に変えて以来、社会的属性が人間の本性に決定的な作用を及ぼして、異なった歴史段階ごとに異なった人間性を生み出している。だからこそ、人間性とはほかでもない、一定の社会的関係の総和でしかありえず、階級社会にあっては人間の階級性でしかありえない、というのである。⁽⁴⁾

2. 人類に「共通」の人間性はあるか

ある意見の主張するところでは、人間はすべて根源的な自然属性をそなえ、かつ一定程度に相等しい感情をもっているから、やはり、飲食、男女、生存、発展等のような「共通のもの」をもっている。人類が共通の一般的人間性をもっていることは、他にその他の生物性をもっていることと同様に、否定すべくもない。階級社会にあっては、一般的人間性は階級性によって人間性の副次的地位に押しやられ、しかもしばしば階級性のために変質する。とりわけ階級闘争が激烈な時には、一般的人間性は消失したかにみえる。だが、実際にはけっして消失しておらず、屈折したかたちで存在し、現われているにすぎない。階級性とは人類本性の「自己疎外」であり、もともと昔からあったというものではない。それは階級社会における人間の一特性にすぎず、人間性の全体ではないのであって、まして「人類の本性」に置換えられるものではない。そして、階級闘争が終結した後も、人類はなお「本性を回復し」、かつそれを日ごとに豊かで完全なものへと育ててゆかなくてはならないのである。⁽⁵⁾

もうひとつの意見が主張するところでは、動物にも生存欲もあれば、性欲の衝動もあり、この点で

は人類と差がないが、しかしそれは単なる動物性にすぎない。といって、愛情、生死、衣食足りた生活を人類共通の永遠のものとする見方は、人間性を抽象的にとらえている。社会的な人類は性本能を愛情に発展させ、生存欲を人間と人間との関係に表しており、そこではすべてが社会性を帯びている。したがって、人間性といえば、具体的人間性あるのみであって、一般的人間性は存在せず、これがすなわち、人びとが心理現象や社会生活のうえでいかに階級の烙印をつけていようとも、基本的感情のうえでは、やはり共通のものをそなえている、ということなのである。⁽⁶⁾

さらに別の意見が主張するところでは、言うまでもなく、飯を食い水を飲み、男が男であり女が女であるといった類の「人間的性情」（すなわち人間性）は、労働者農民であれ、資本家であれ、誰しもが「求める」ものであり、生存、衣食足りた生活、発展もまた誰しもが「望む」ものである。だが、どのように飲食を得、いかように男が男であり女が女であるかとなれば、労働者と資本家が通じあうことは難しく、農村の農民とプチブル知識分子も必ずしも一致しない。わが国の古籍にも、ある者は「豆や水をうまいと思ひ」、ある者は「ご馳走をまずいという」とあるが、農民は芹菜〔セロリ状の植物〕をうまいと感じるのに、「旦那衆」は一口食べただけで胸が悪くなってしまう。「男女」婚姻、家庭にかかわる要求ともなれば、人間の実際の物質生活とのかかわりがいっそう強く、人間の実際の物質生活に應じて、明らかに大きな違いがあるものである。この点に疑いをはさむ余地があるか。さらにたとえば、社会主義社会にあっては、「働かざる者は食うべからざる」ことが、ひきつづき搾取を維持しようとする人びとの「飲食男女」という「人類の本性」を妨げてしまう。かつてはただ「花の香り」をかぎ、「鳥のさえずり」を聞くことしかできなかった有閑階級が、今日では労働に参加し、時には全身汗にまみれさ

えせざるをえなくなって、それがかれらのかつての好みを妨げるようになった。そしてその好みもまたいわゆる「人類の本性」にそうのである。人は誰しも「生存」「発展」をめざすが、しかしある者は社会主義を、ある者は資本主義を発展させようとするのであるから、目標がどうして「共通」でありえよう。したがって、階級社会に、そもそも抽象的な「共通の人間性」などなく、あるのは具体的で、現実的で、特定の階級に従属しながら一定の歴史的條件に制約された「人間性」ばかりである。たとい共産主義社会になろうと、人間性の発展はやはり「共通する」のが難しい。⁽⁷⁾

3. 「人間性」問題に関するマルクス・エンゲルスの論述をどう理解するか

論争の中で、異なった観点に立つ論文がいずれもマルクス・エンゲルスの関係の論述を引用して、理論的根拠としている。中でも解釈が大きく分かれるのが、マルクス・エンゲルスの次の二つの言葉である。

「ブルジョアジーとプロレタリアートは同じく人間の自己疎外である。だがブルジョアジーは、この自己疎外のうちにおのれが満足し安定していることを感じており、この疎外をおのれの力強さの証明であるとみなしており、かつ、疎外のうちに人間的生活の外見を得ている。いっぽうプロレタリアートは、この疎外のうちにおのれが破滅させられたと感じ、かつ、おのれの無力と非人間的生活の現実性を感じている。この階級は、ヘーゲルふうのことばでいえば、唾棄された状況のもとでのこの状況に対する憤怒であり、この憤怒はこの階級の人類的本性と生活状況との間の矛盾から必然的に引き起こされるのであり、そしてその生活状況は自らの人類的本性に対する公開の、断固たる、全面的な否定なのである。」

(マルクス・エンゲルス：《聖家族》
〔第四章のうち「批判的傍注第二」〕

「人類が、社会的すなわち人間性にみちた人類としての、完全に、意識的に、かつ今日までの発展のまったき豊かさの中で育んだ、自身に対する還帰としての共産主義。」

(マルクス：《経済学・哲学手稿》
〔第三手稿、「私的所有と共産主義」〕

ある意見が主張するところでは、マルクス・エンゲルスは人間の「自己疎外」を分析した後、人間性にそむくさまざまな不合理な状態を批判し、「人類の本性を取りもどす」観点を提起した。プロレタリアートが自分自身を解放でき、かつ解放すべきであるのはなぜかといえば、「すでに形成されたプロレタリアートのうちには、實際上、合人間性的なものが一切失われ、ひいては合人間性的な外見さえ失われているために、プロレタリアートの生活条件のうちに、今日の社会の一切の生活条件が非人間性の頂点に達しているために、プロレタリアートたることによって、人間が自己を喪失しており、しかも同時にこの喪失を理論的に意識しているだけでなく、さらに、避けようのない、覆うべくもない、絶対抗うべくもない貧窮に迫られて、直接その非人間性に反対せざるをえないために」、プロレタリアートは必然的に戦いに立上るが、それは「自己の地位に集約された今日の社会のあらゆる非人間性的生活条件を消滅し」、そうして「自己自身の生活条件を消滅する」ためなのである。もし人間性に相対的に普遍的な一面があることを認めないなら、それは實際上、プロレタリアートが人間性の真面目を回復するために戦っている意義の偉大さを過小評価することになる。⁽⁸⁾

もうひとつの意見が主張するところでは、マルクス・エンゲルスの《聖家族》とマルクスの《経

済学・哲学手稿》は、いずれも彼らの初期の著作である。この時期は、まさにマルクス主義が形成されて日も浅く、精確化にむかいつつある段階にあった。したがって、唯物弁証法的観点によってこれらの初期の著作を研究し、書物全体の基本精神から出発して著作中の術語を理解すべきであって、個々の語句をとらえて気ままな解釈を下してはならない。「人類の本性」なる一語は、マルクスがここで使ったとき、すでにフォイエルバッハのいう「人類の本性」とはまったく意味内容が異なっている。ここでは人間の社会性について言っているのであり、人類がそれぞれの具体的経済条件の制約の中でそなえているそれぞれの具体的社会属性を指しているのであって、マルクスの後の精確な術語によって表すなら、「社会的関係の総和」にはかならない。この原因のほか、マルクス・エンゲルスが「人類の本性」なる一語を使うとき、その意図は人間性と動物性の区別を強調することにある。マルクスによれば、「人類の本性」は具体的で階級的な人間のうちに存在するのであって、それな当然ながらその「階級性」にかならず、「人誰しにも通じあう」ものなどではない。「自己疎外」なる語の意味について見れば、原始社会においては、人間的個性の発展は客観的社会の発展と一致していたが、人類が階級社会に入ってから、人間の個性が私有制と労働分業によって制約を受けたため、「疎外」を生じるにいたった。この「疎外」は共産主義社会に到達してはじめて消滅するのであり、人間の個性はその段階にいたれば社会の発展とふたたび一致することになるだろう。その意味もあって、マルクスは重ねて「還帰」なる語を使ったのである。だがこれはけっして一部の人が言うような原始的「人類本性の回復」ではなく、「自覚的方式による、かつすでに発展をとげたあらゆる豊かさをそなえたうえでの、自己への完全な還帰」をいうのである。プロレタリアートが共産主義のために進めているたゆみない

戦いを、抽象的な「人類の本性」回復のためであると考える観点は、プロレタリア革命への歪曲であり、また共産主義社会への歪曲である。⁽⁹⁾

4. 文学史上の傑作と「人間性」「階級性」との関係

ある意見が主張するところでは、文学史上の最大傑作は、かならず豊かに人道主義（あるいは、「人間性」）をそなえた作品である。これらの作品はほとんどが人びとを階級的束縛から脱却するよう励ますか、大多数の人民の非人間的な生活を悲しみ憤るか、社会の非合理性が人間の才能や知恵の発展を束縛していることに反対するか、人類の本性を発揮するに足る合理的な人間生活が営まれるよう望むかしている。こうした作品はいったん階級社会に送り出されると、たちまち階級社会の秩序を乱す武器となる。だがまさにこれこそ最も人間の性情に通じているのである。これまた数多くの古典名作が人びとに共通の感情を呼び起こすことのできる原因である。⁽¹⁰⁾

もうひとつの意見が主張するところでは、人間の性情（あるいは「人間性」）はもともと生活自体のうちに存在しており、真に生活本来の様相どおりに生活を描いたものは、おのずから人間的（人間性的）味わいに富んでおり、またかならず強い政治性を帯びてもいる。たとえば《アンナ・カレーニナ》は、家庭的テーマと社会的テーマが緊密に織り合わさり、政治性と人間的味わいとがひとつに溶け合っている。《紅樓夢》は情趣こまやかな人間的味わいに溢れているばかりでなく、きわめて強烈な政治性を帯びてもいる。阿Q、オブローモフ〔ゴンチャロフの長篇小説『オブローモフ』の主人公〕、フォマ・ゴルデーエフ〔ゴリキーの長篇小説『フォマ・ゴルデーエフ』の主人公〕、および文学作品中のあらゆる典型は、われわれの実際生活におけるひとりひとりの人間と同様、かれらのうちに、階級的共通性のほか、か

れらそれぞれに特有の個性と人間として当然もつべき人間性をもそなえているのである。⁽¹¹⁾

さらに別の意見が主張するところでは、古今内外の芸術の巨匠たちは、いつでも激しい愛憎の念と明確な是非の基準をもっていた。かれらはいつでも、押さえつけられ、恥ずかしめられ、損なわれている人びとに大きな共感を寄せるとともに、人びとを押さえつけ、恥ずかしめ、損なう人びとを激しく憎んでいた。かれらはいつでもある種の「人間性」を讃え、高めるとともに、もう一種の「人間性」を攻撃し、鞭打っていた。かれらは情熱をこめて、異なった階級、異なった階層の典型形象を作り出し、さまざまに異なった人間性（すなわち階級性）の衝突を描いたのであって、空しく「人誰しもに通じあう」「人類の本性」を語ることは絶えてなかった。その上、文学史的にみて、異なった階級が同一点から出発して同一の作家を推賞し、同一の作品を喜び、同一の人物形象を讃えたという例はない。異なった階級の人びとが同一の作品に共感したとしても、その内容と原因は異なっている。たとえば、杜甫の作品を、封建階級も推賞し、われわれも推賞しており、あたかも共感が生まれたかに見えるが、そこには根本的な区別がある。封建階級が共感した内容は杜甫の作品中の、たとえば封建忠君思想のような消極的部分であり、いっぽうわれわれプロレタリアートが共感するのは、杜甫の作品中の積極的部分、すなわち作品に表現された人民の苦しみや人民に対する共鳴などである。したがって、「共感」現象は表面的にはほぼ同じに見えるが、実際にはたがいに無縁なのである。これらのことはいずれも「共感」がまったく階級的思想にもとづいていることを物語っている。いわゆる「永久不変の形象」などは、そもそも存在しない。芸術形象がもし時代の、民族の、階級の精神的様相を真実に反映し、人民の思想、感情、願望、要求を真実に反映しているなら、この芸術形象は認識価値と美学的価値をそなえているので

あり、それによってかなり長年月にわたる生命力を獲得しているのである。だがこれは時代を越え階級を越えた「永久不変の形象」ではない。この形象が人びとに対してもつ働きも、時代の発展と階級の変化にしたがって変るのであり、永久不変ではありえない。⁽¹²⁾

5. プロレタリアートは「人間性」に 対していかなる態度をとるべきか

ある意見が主張するところでは、プロレタリアートは階級闘争の武器によって全人類を解放し、人類の本性を解放し、さらにそれを日ごとに豊かに充実させていく。この遠大な革命的目的性を、文学芸術家は大いに重視しなくてはならない。社会主義段階に入ってから後は、プロレタリアートの文学芸術は、なおさらこの点に特に留意しなくてはならない。それがプロレタリア革命の目的——全人類を解放し、人類の本性を解放すること——に奉仕することなのである。それには人誰しにも通じあう、人類の本性に根ざした人道主義にもとづいて階級闘争を描き、人びとに階級の存在の憎むべきことをわからせ、同じ階級の人びとを戦いへと立上らせるだけでなく、敵対階級の人びとをも震えさせたり心底から恥入らせたりして、かれらの精神を瓦解させなくてはならず、それをプロレタリアートの遠大な目標——「人類の本性を回復する」——を達成する日まで持続しなくてはならない。だが、われわれが文学芸術上の階級理論の原理を機械的に理解したため、われわれの文学芸術作品にしばしばあるものが欠けているという結果を招いた。欠けているものとは「人間的性情」と「人類の本性に根ざす」「人道主義」である。したがって、われわれは「階級闘争に奉仕する文学芸術作品によりいっそう人間らしさを盛りこませ、作品中の階級戦士によりいっそう人間性の輝きをきらめかせなくてはならないのである。」⁽¹³⁾

もうひとつの意見が主張するところでは、プロ

レタリア文学芸術は「革命という機械全体の一構成部分」であり、「人民を団結させ、人民を教育し、敵を攻撃し、敵を消滅する」力強い武器である。こういう文学芸術は、かならず一定の政治傾向性をもって、プロレタリアートの感情を表現し、プロレタリアートの志気を反映しなくてはならず、またかならずブルジョア側の「人間らしさ」を除き去らなくてはならない。もしこの「人間らしさ」を留めているなら、それは「階級的立場を失った」のである。社会主義文学芸術に「人間的性情」、「人間性」を反映せよと呼びかけるのは、「忌憚なく言えば、ブルジョアを美化し、プロレタリアートを醜悪化することにはかならない」。⁽¹⁴⁾

さらに別の意見が主張するところでは、「文学は永久不変の人間性を描くものだ」という観点は、もちろん妥当ではないが、といって人間の階級性しか描いてはならないという意味でもない。いわゆる階級性とは、人びとが抽象能力を働かせて、同一階級の構成員各人から概括してきた共通性という。純粹の階級性なるものは、人びとの頭の中にしか存在せず、実際生活における具体的人間個人には存在しない。文学は、対象が具体的で行動している人間であるいじょう、その人の生き生きとした独得の個性を描くべきであり、その人と周囲の人や事がらとの具体的なつながりを描き出すべきであって、抽象概念の中にしか存在しない階級性を描いてはならず、人物の動きをその人物の階級の図解に仕立て上げてはならない。過去において、すぐれた古典作家の絶対多数は、階級性などという観念を知らなかった。にもかかわらず、かれらは数多くの不朽の典型を描き出した。しかも、これら典型人物から、われわれはこれら人物が属した階級の特性を見てとることができる。それゆえ、われわれは創作に当たって、抽象的な階級性から出発していわゆる階級の本質を反映した「典型」を造型してはならず、現実生活の実感か

ら出発して、生き生きとした、鮮明な個性をもつ「典型」を造型するほかないのである。⁽¹⁵⁾

二．近年来の論争

1. 「人間性」の概念と意味

「人間性」とは何か、および「人間性」をいかに理解するかという問題をめぐって、概括的に見れば、以下の五つの代表的な見方がある。

その一は「自然本性」説で、この意見によれば、人間性とは「人類の自然本質」にはかならない。マルクスが《経済学・哲学手稿》の中で「強調した『人間の肉体と精神の両面の本質的な力』がすなわち人間性である」。⁽¹⁶⁾

その二は「社会属性」説である。この意見が主張するところでは、人間性とは人間の本質にはかならない。人間の本質とは人間にそなわったいかなる属性からも構成しうるというものではない。それは人間に特有の、それを失えば人間ではなくなるところの要素でしかありえず、そしてこの要素とは人間の社会性にかならない。この社会性は階級社会にあっては、主として階級性となって現れるが、まるまる階級性というわけではなく、一定の非階級性としても現れる。⁽¹⁷⁾

その三は「階級属性」説である。この意見が主張するところでは、人間の本質的属性は人間の社会属性でしかありえず、階級社会における社会属性は階級的属性でしかありえない。したがって、階級社会にあっては、人間性は人間の階級性、あるいは階級的人間の人間性でしかありえない。人間性を階級の範囲から踏み越えさせると、人間性は人間の社会属性からも踏みこえてしまい、それはすなわち人間性を人間の生物属性の中に引きこむことであって、結果は観念論にむかうほかない。⁽¹⁸⁾

その四は社会属性と自然属性との「二重の要素の統一」説である。この意見が主張するところでは、

「歴史と現実の中で生活する具体的で血の通った人間は、第一に、社会の構成員として社会性をそなえた人間と、動物として自然特性をそなえた人間との、対立の統一体である」。「人間の本性は、あるいは人間性とも呼ぶが、人間の社会属性と人間の自然属性との対立の統一、換言すれば社会性と動物性との統一、階級性と超階級性との統一にはかならない」。⁽¹⁹⁾

その五は社会属性と自然属性との「主副融和」説である。この意見が主張するところでは、人間性は、主として人間の社会性であるが、中に人間の自然属性とひとつに融けあった自然属性をも含んでいる。ここでいう自然属性は純粹に動物的な属性ではなく、人類社会の物質生活条件と生活実践とによる影響と制約を受けた人間の自然的要素をいう。⁽²⁰⁾

2. 人間の自然属性と人間の社会属性および両者の間の関係をいかに認識するか

ある意見が主張するところでは、人間性問題の範疇では、ただ社会学的視角から人間の本質的属性を扱うこと、すなわち人間の社会属性を研究することができるのみであって、生理学、解剖学的視角から人間性を扱って、自然属性もまた人間性であるという結論を引出してはならない。人体構造を研究する生物学は人間の社会属性と無縁でありうるし、社会的人間を研究する場合は、当然、人間の生理機能を考慮する必要がない。二つの属性、この基準は、混同してはならないし、同列に論じられるものでもない。⁽²¹⁾

またある意見が主張するところでは、「マルクスは人間の社会属性を強調した際、人間の本質の中の自然属性を否定したことはなかった。人間の自然属性と社会属性の関係は対立の統一の関係（すなわち抽象的人間性と具体的人物との対立の統一）であり、人間の自然属性は異なった歴史時期と異なった歴史条件のもとで、生き生きと具体

的に現れる。たとえば男女の性愛という自然本性は、異なった社会歴史段階において物質生活条件の相違により、一定の社会と異なった階級の中で、いずれも具体的で異なった階級属性を帯びている。この社会属性は統一の一面をもつと同時に、対立の一面をもつ。人類が動物界から携えてきた獣性（たとえば集団婚雑交、動物を丸ごと生で食うこと）は、人類社会の物質生活や文化生活の進歩につれて、たえず改造されてきた。新しい物質生活条件に照応した新しい本質、新しい属性が、たえず出現しかつ形成されつつある。これは人間の自然属性が人間の社会属性に照応しない状況と言ってよい。同時に、人間の社会属性自体にも、たとえば婦人を淫楽の犠牲品にするとか、買売婚その他のように、人間の社会属性に照応しない状況があるのである。⁽²²⁾

もうひとつの意見は、人間の自然属性と人間の社会属性とは基本層と特殊層とが結合した関係であるとする。この見方によれば、自然本性と社会性とはその歴史過程について言っても論理過程について言っても、いずれも人間性を構成するもののうちの二つの層であり、自然本性はその中でも最も基本的な層である。縦の視角、すなわち歴史過程から見れば、人間の自然本性すなわち生存本能が、物に対する人びとの需要、および生存闘争における有目的の労働を生み出し、加えて大自然の客観条件が人びとを促して結合させ、社会を作らせ、社会性をもたせるにいたった。人間が自然本性から出発して獲得した社会性の中で、媒体となっているのは人間の能動性である。横の面から見れば、ひとりの人間の一生に最初に働きかけるのは自然本能の衝動であり、その後により社会性が制約と影響を及ぼしてくる。人びとのいかなる行動も、つまるところはすべてこの二者の相互作用の結果である。ここでは、自然本性が土台であり、社会性は自然本性の産物なのである。⁽²³⁾

さらに別の意見は、自然属性と社会属性とは「土台」と「主導」の二重関係であるとする。この意見によれば、人間の自然性と社会性は人間性の分割不可能な異なった二側面である。たとえば労働は、疑いもなく社会的行為であるが、しかし必要な飲食と休息を欠けば、人間の労働能力は維持するすべがない。飲食は、人体の新陳代謝を充足する点から言えば、自然性に属する。だが食物を手に入れる方式や手段について言えば、当然ながら社会性をそなえている。マルクスは『聖家族の準備手稿』〔『経済学・哲学手稿』に同じ〕の中で、「自然の人間的本質は社会的な人間にとってこそはじめて存在する。社会の中でこそはじめて、自然は人間にとって人間との絆となり、他人にとっての彼の、および彼にとっての他人の存在とな〔り、また人間的現実に必要な不可欠な要素となる〕のだからであり、社会の中でこそはじめて、自然は人間自身の人間的存在の土台となるのだからであり、社会の中でこそはじめて、人間の自然的な存在は彼の人間的な存在となり、そして人間にとって自然は人間となるのだからである。」と指摘している。したがって、人間の自然性はしばしば社会性の制約を受けるのであり、社会性が主導、自然性が土台であって、社会性は社会における人間の地位と性質を体現している。人間の社会性が人間の自然性を制約することは、けっして自然性の本質を軽視してよいことを意味しない。社会の進展過程にあって自然と、他の階級や他の個人と、関係を生じない階級や個人がどこにあらう。もし自然から生活資料を求める関係を断ち、その他の社会構成員とのつながりを断つなら、誰であれ、生きてはゆけないのである。⁽²⁴⁾

3. 「共通の人間性」は存在するか、

「共通の人間性」とは何か

一部の同志は、階級社会に「共通の人間性」は存在しないと考える。かれらによれば、人間性は

階級社会にあっては人間の社会属性でしかありえず、そしてこれらは具体的であり、人びとの物質生産活動と、この活動と照応した社会関係との産物である。物質は社会関係の発展変化であって、人びとの意識活動を決定する。あらゆる社会関係の中で決定的な働きをするのは生産関係であり、階級社会にあっては、階級関係となって現れる。したがって、人類が異なった階級に分化した後、人びとはいずれも自身の物質的利益によって活動を行っている。人間の本性はこの物質的利益による社会活動につれて、それぞれの階級の階級性へと分化したのであって、「人誰しにも通じあう」抽象的な普遍的属性などそもそも存在しえない。階級社会には、階級性をおびた人間性が存在しうるのみであって、超階級的な人間性はけっして存在しない。階級関係を離れて人間と人間との関係を観察するいかなる観点も、すべて観念史観の泥沼に落ちこまずにはいない。⁽²⁵⁾

前記の観点に対しては少なからざる同志が賛成せず、かれらは、「共通の人間性」はやはり存在すると考える。だが、「共通の人間性」とは何かという問題になると、見方は以下に見るように必ずしも同じではない。

その一は自然性、社会性など多くの要素が総合したものとする説である。この意見によれば、「共通の人間性」とは人間の自然性および人間の社会性の中の非階級性部分、たとえば飢えれば食い渴けば飲むこと、健康を楽しみ病気を苦しむこと、礼儀や衛生を重んじること、および言語、思惟、労働、能力、個性気質、共通の美感等々を指すべきである。この「共通の人間性」は、たしかに各階級の人びとが共有し、たがいに通じあう。これはけっして「抽象」的ではなく、人間の社会实践の中に具体的に存在している。この意見をとなえる同志の一部は、さらに次のように考える。人間性はいつでも自然本性、社会性と階級性をひとつに集めて成っている。その中で階級性が支配的に

位にあるが、しかし超階級的要素はいつでも階級性要素と並存している。たとえば、衣食住、親子友人、両性関係等々はいずれも人間性のうち非階級的要素が比較的多い側面である、と。⁽²⁶⁾

その二は「純粋に人間的な関係」説である。この意見によれば、エンゲルスは《フォイエルバッハ論》の中で、「人びと相互の間の愛情にもとづく」「純粋に人間的な関係」、「すなわち性愛、友情、共鳴、献身精神、等々」なる見解を提起した〔同書第三章〕。この「純粋に人間的な関係」とは、すなわち人間性のうちの共通性である。⁽²⁷⁾

その三は「社会共通性」説である。この意見によれば、人類は自然性にもとづく社会活動の中で、共通のものを有している。それがすなわち一定の社会集団の愛国主義、民族性、および進取の欲望、発展の要求等々であり、これらの人びとの客観的社会性は、自身の質的規定性によって人間の本質のうちに存在しているのであり、人類に共有されているのである。なぜならこれら社会の構成員はいずれもひとつの社会の中で共通して生活し、共通の、あるいは類似の環境を有し、さらに、共通して、自然と戦う手段を使い、同一の工芸技術を使い、同一の言語を使い（一民族である場合）、思惟の手段（たとえば論理修辞学など）を使っているからである。このほかまだ、血縁関係、地域関係（たとえば同郷）等々がある。階級闘争が緩和したとき、これらの関係は実際に存在する階級矛盾を覆いかくして、人類の社会共通性を多く表してくる。⁽²⁸⁾

その四は「共通の心理現象」説である。この意見によれば、心理現象としての人間性は、思惟、感情、性格、願望その他のいずれであれ、一般に階級の烙印がついている。だがそれは、階級の烙印のついた人間性イコール人間性のすべてと断言わけではない。階級社会にあっては人類の意志、感情、習性等々もまた、似通い、通じあい、ごく近い部分があることは、否定すべくもない。この

一面が存在しなければ、人と人との間は疎通も接触もできず、人類は統一社会を構成できないことになる。階級社会にあって、人間性には階級性の一面がそなわっているが同時に、共通性の一面も存在していることは明らかである。⁽²⁹⁾

4. 共通の人間性と階級性との関係

「共通の人間性」を肯定する同志たちの間に、共通の人間性と階級性との関係をいかに扱うかという問題をめぐって、以下のような幾つかの見方がある。

ひとつは「対立を表さない内在的結合関係」である。この意見によれば、人間の階級性は二つの源から導き出されている。第一は人間の自然本性であり、これは人びとがおのれの利益を追求することとなって現れる。第二は人間の社会性であり、これは特定の社会的存在に対する人びとの態度となって現れる。したがって、われわれは人間性と階級性を対立させてはならないばかりか、両者を混同して論じてはならない。主体たる人間の自然本性はつねに客体たる社会性（すなわち社会的存在）とつながろうとするものであり、いっぽう客体はかくも多彩で変化に富んでいる。だから、両者が結合したとき、主体は必然的に客体の発展変化にしたがって自身の多様性を展示する。人間の階級性とは、一定の社会的歴史的条件のもとにおける人間の自然本性の特殊な現れ方のひとつであり、こういう現れ方は自然的過程であるうに、社会的過程でもあって、この両者の関係からは、両者の間の対立を見出すことができない。

何故この両者を混同して論じてはならないと言うかといえば、階級社会にあっては、人間性は単に階級性となって現れるばかりでなく、さらに他のものとなっても現れるからである。たとえばそれぞれの階級の間では、それは利益の対抗や矛盾となって現れるが、同一階級内部の個体各人の間では、それは依然相互協力の要求となって現れるのである。⁽³⁰⁾

もうひとつは「対立の統一の関係」である。この見方によれば、階級社会における共通の人間性と階級性との関係は、一般と個別、普遍と特殊の関係であって、対立の統一の関係である。階級性をおびた人間性は、無階級社会における共通の人間性の疎外であり、共通の人間性という矛盾の統一体が分裂して自身の反対面へと向ったのであって、共通の人間性に対する否定である。共產主義社会に進むと、人間性はもう一度疎外を経、階級性をおびた人間性は、新たな共通の人間性に「還帰」して、否定の否定を達成する。疎外と弁証法的否定は、いずれも止揚であるが、それは克服であるうに保留でもあって、単純に放棄するのでもなければ、何らのつながりも何らの引きつぎもなしに断ちきるのでもない。階級性をおびた人間性は共通の人間性から疎外によって生まれ、ふたたび共通の人間性へと「還帰」してゆくのであって、それは否定の否定の中間の一環であり、階級性をおびた人間性と共通の人間性との間是对立もし統一もしており、両者の間につながりが存在するのは必然的なのである。動物性から区別される人類の共通性と階級性をおびた人間性とは、いずれも社会の具体的個人から抽象したものであって、程度の異なった共通性、普遍性をそなえているとはいえ、この二者の関係について言えば、前者は一般、普遍、共通性に属し、後者は個別、特殊、個有性に属している。個別性たる階級性は、かならず一般性たる人類の共通性につながりあって存在しており、一般性たる共通の人間性は、個別性たる階級性のうちに宿って、一定の階級性をおびた形式を通して現れるのである。⁽³¹⁾

さらに別のひとつは「相互滲透、相互転化の関係」である。この意見によれば、階級が生まれる以前、人間性は共通であったが、階級関係が生じて後、人間性の疎外が生じた。歴史発展の全体から見れば、この疎外もまた人間性の発展であり、この発展過程で、人類はひきつづき共通の人間性

の側面を發展させている。共通の人間性と階級的人間性とは統一体の中であって、たがいに滲透、転化しあい、進歩性の精華を吸収して、たえず向上してゆく。共産主義が勝利すれば、人間性の疎外は完全に消え去り、人間性はより高い昇華を達成するであろう。マルクスは後に「疎外」論を乗り越えて、社会の基本的矛盾の發展の必然性という点から共産主義的人間性を明らかにしたのである。⁽³²⁾

5. マルクス・エンゲルスの著作に現れた 「人間の一般的本性」と「人間の本質」 なる概念をいかに理解するか

マルクスは《資本論》の中で「第一に人間の一般的本性を研究し、次いで、それぞれの時代に歴史的に変化した人間の本性を研究すべきである」〔第1巻第22章の注63〕と指摘し、《フォイエルバッハに関するテーゼ》〔第6項〕の中で、「人間の本質は、各個人に固有の抽象物ではなく、現実的には、あらゆる社会的関係の総和である」と指摘した。

マルクスが上記の二個所で提起した「人間の一般的本性」および「人間の本質」という概念、およびこの二節の論述の基本精神について、以下の幾つか異なった理解がある。

ある意見の理解するところでは、マルクスはエンゲルスが整理した《資本論》の中で述べた一節を通じて、マルクス・エンゲルス両指導者の晩年であっても、やはり「一般的人間性」の存在を認めており、かつ、人間の階級性を「人間性」の歴史的変化の一形態とみなしていることを明らかにしたのである。この一節における最初の「人間性」は、人間が脊椎動物として他の禽獣から区別される生理、生物本性（すなわち自然属性）を指し、第二の「人間性」は、人間の本性が歴史的発展につれて変化する形態、すなわち歴史的に変化している社会的関係の総和を指すのであって、階級性

をも中に含む。⁽³³⁾

もうひとつの意見の理解するところでは、マルクスがここで言う「人間の一般的本性」とは、人間の自然属性を指すのではなく、まさしく人間の社会属性を指すのである。もし「人間の一般的本性」が人間の自然属性を指すというなら、マルクスとエンゲルスの初期の著作に含まれる人間性問題に関する大量の論断が解釈できなくなる。たとえば、《聖家族》で疎外理論を論述した際、資本主義社会制度における生活条件が「非人間性の頂点に達しているため」、「プロレタリアは實際上、合人間性的なものをすでに完全に失っており」、「この人間性にそむく現象に怒りをこめて反対しないではいられなく」されている、と指摘している。ここでいう「人間性」とは、けっして人間の自然属性を指すのではない。なぜなら、たとえば飢餓や性的衝動、あるいは飲食や男女等々のような、生物学あるいは生理学の範疇に属する人間の自然属性は、人間の本能であり、この本能はいかなる生活条件のもとであろうと「完全に失う」ことなどありえないからである。人間の自己疎外とは、生理的本能の面すなわち人間の自然属性の意味において生じるものではない。マルクスのいう「人間の一般的本性」の概念が、人間の自然属性を指すのではなくて、人間の社会属性を指すのであることは、マルクスの初期の著作中の「人間の本質」に関する論断を根拠にして知ることができる。《資本論》では「人間の一般的本性」を提起したのみで、この概念について具体的な説明を加えていないが、マルクスは「人間の本質」についてかつて詳細な論述を行なっている。「人間の一般的本性」とは「人間の本質」のより確かな呼び方にほかならず、両者の意味内容は基本的に一致している。マルクスは《ジェームズ・ミル著〈政治経済学要綱〉からの抜粋》の中の、人間の本質について述べた一節で、人間の本質が人間の社会属性であって、人間の自然属性ではないことを、

はっきりと述べている。人間はさまざまな属性をそなえているが、人間の本質はこれらすべての属性がひとつになった混合物でもなく、これら属性のいずれの一種もすべて人間の本質の構成部分になりうるというわけでもない。人間の自然属性は、飢餓や性的衝動等々のように、動物にもそなわっている。人間の本質を構成するものは、まさしくかの人間に特有の、それを失えば人間が人間でなくなる要素なのであり、この要素とは、人間の社会性でしかありえない。⁽³⁴⁾

さらに別の意見の理解するところでは、マルクスが《フォイエルバッハに関するテーゼ》の中でフォイエルバッハを批判したのは、ただ、フォイエルバッハが人間の本質を「純粹」な「自然につながりあった共通性」であると理解した誤りを指摘したにすぎない。マルクスは人類の本質に自然属性がそなわっていることを、けっして全面的に否定してはいない。マルクスは《経済学・哲学手稿》の中で、「飲食や出産等々ももとより真に人類的な働きではあるが、もしこれらの働きを最後の唯一の究極目的に仕立てあげるなら、こういう抽象においては、これらの働きは動物的である。」〔第一手稿、「疎外された労働」〕とはっきり述べている。もしも、飢えて食い渴いて飲むとか、両性関係とかいった人間の自然属性を人間から抽象して、「人類活動のその他の範囲から切離す」なら、この自然属性は純粹な動物性であって、その他の動物と何ら変らなくなる。しかしながら、人類の自然属性は実際には社会属性と切離せず、人間の生理機能は人類社会の物質生活条件と生活実践に影響され、制約されるものなのである。したがって、人間にそなわった自然属性はその他の動物の生物属性とは異なる。両性関係について言うなら、エンゲルスは《家族、私有財産および国家の起源》の中で、両性関係が異なった歴史時期にもつ異なった特徴を具体的に考察している。集団婚、対偶婚および姦通と売春で補足された一夫

一婦制という三つの主要な婚姻形式が、野蛮時代、未開時代、文明時代という人類発展の三つの主要な段階に照応するのである〔同書第二章「家族」〕。したがって、「人間の本質は社会的関係の総括である」との命題は、主として人間の社会属性を指すがしかし、人間の社会属性と不可分に融けあっている自然属性をも含む、と理解してよい。⁽³⁵⁾

一部の同志はこうも考える。いわゆる「人類の本性」、「人間の一般的本性」とは「あらゆる社会的関係の総和」である。だが、「あらゆる社会的関係の総和」とは、当然ながら、フォイエルバッハが強調したように人間の感覚的一面に限定されるのではなく、社会生活における人類の実践を言うのである。人類の五官の感覚を含むばかりでなく、人間の感性、意欲、動作、愛情等々をも含むのであり、そうであってこそ「あらゆる社会的関係の総和」と呼ぶことができるのである。⁽³⁶⁾

6. 人間性問題をめぐる毛沢東同志の 論述をいかに理解するか

毛沢東同志はかつて《文芸講話》の中で、「人間性なるものがあるのだろうか。もちろんある。だが具体的な人間性があるだけであって、抽象的な人間性はない。階級社会にあっては階級性をおびた人間性があるのみであって、超階級的な人間性などはない」〔同書「結論」第四章〕と指摘した。毛沢東同志のこの論述の基本精神をいかに理解するかについても、見方は必ずしも一致していない。

ある意見が主張するところでは、毛沢東同志はここで抽象的な人間性を否定して、具体的な人間性を肯定し、かつ、具体的な人間性とは階級性をおびた人間性でしかありえず、超階級的な人間性などないことを説明している。毛沢東同志が講演のなかでふれた最初の「人間性」を後の「人間性」と切離して二つの概念とし、そこから毛沢東同志も抽象的な人間性を肯定しているとの結論を引出すやり方は、明らかに毛沢東同志

の講演の本意にそむいている。⁽³⁷⁾

ある意見が主張するところでは、毛沢東同志がここで論じている「人間性」は、「第一に、マルクス・エンゲルスがいう「人間性」と、概念が必ずしも同じではなく、）単に人びとの歴史的に変化する社会的関係の総和を指すのであって、あるいは人間の社会性といってもよい。第二に、たといそうであっても、毛沢東同志はやはり「人間性」というものがあると考えている。第三に、具体的な人間性は階級社会にあってはすべて階級性をおびるが、「おびている」とは「それにほかならない」とか「等しい」とかと同じではない。第四に、「超階級的な人間性などはない」というのは、具体的な「人間性」が階級性と非階級性との統一体の形でしか現れえないことを言うのであり、この統一体は、階級社会のいかなる時、いかなる状況のもとにあっても、すべて階級性の一面を含んでいる。ここで指摘すべきは、毛沢東同志の言が、かの人間性を階級性と完全に等しいとみなす論点に向けて述べたものだという点である。だからかれが強調したのは階級性であって、その上、非階級社会では「人間性」は階級性をそなえていないという言外の語がこめられているのである。この言外の語は、階級社会から無階級社会への過渡期に生きる人びとにとって、きわめて深い意味をもっている。⁽³⁸⁾

一部の同志はこうも考える。毛沢東同志が述べたのは「階級性をおびた人間性」であるから、明らかに「おびる」べき主体と「おびら」れる客体があるわけである。この主体は何かといえば人間性であり、客体は何かといえば階級性である。階級社会にあって、ひとりひとりの思想全体から言えば、階級性をおびたいか否かは、人間の主観点意志で決まるものではないが、人間の具体的な個別の思想について言えば、「おび」ているか否かの相違、あるいは「おび」方が多いか少ないかの相違がある。⁽³⁹⁾

一部の同志はさらに進んで次のように指摘する。毛沢東同志は《文芸講話》の中で、「われわれはプロレタリアートの人間性、人民大衆の人間性を主張する」と述べたが、ここにいう「人民大衆の人間性」は、「プロレタリアートの人間性」とおそらく意味内容が同じではあるまい。すなわち、階級性をおびたプロレタリアートの人間性だけではない。毛沢東同志が後に《人民内部の矛盾を正しく処理する問題について》の中で定めた人民の範囲にしたがえば、「人民大衆の人間性」はより広い解釈をすること、すなわち人民内部の共通の人間性と理解することができるのではないか。1961年、毛沢東同志は何其芳同志との談話の中で、「各階級それぞれに自らの階級の美があるし、各階級に共通の美もあります。“口の味わいにおけるは、同じく嗜むところ有り”〔孟子・告子篇〕ですよ」と述べた。美と人間性とは違いもあればつながりもある二つの範疇であるが、この共通の美についての毛沢東同志の意見は、われわれが人間性問題を全面的に認識するうえに大きな示唆を与えてくれる。とりわけかれは孟子の「口の味わいにおけるは、同じく嗜むところ有り」という、共通の人間性の存在を説明しうることばさえ引用しており、このことばは一定の客観的事実を反映している。これを毛沢東同志の「われわれはプロレタリアートの人間性、人民大衆の人間性を主張する」ということばにつなげれば、異なった階級には異なった人間性があり、同時に共通の人間性もあることを、説明しているのではあるまいか。同じものもあれば違ったものもあり、同じでもあり違ってもある、というふうに理解してよいと自分は思う。⁽⁴⁰⁾

7. 魯迅は「人間性」をどう扱ったか

ある意見が主張するところでは、すでに三十年代の初めに、魯迅は梁実秋との論争の中で、梁実秋が提起した「文学とはこの最も基本的な人間性

を表現する芸術である」という観点に批判の矢をむけて、超階級的な人間性論に反対することをきわめて明確に表明した。魯迅は「文学は人間を借りなければ、『人間性』を示しようがないが、いったん人間を用いれば、しかも階級社会にあっては、その所属する階級性を免れることは絶対にできない。それは『束縛』を加えるまでもなく、必然に発することなのである。」「〔《二心集》所収《「硬訳」と「文学の階級性」》〕「わたし自身は、性格感情等々はすべて『経済に支配される』（経済組織にもとづく、あるいは経済組織に依存する、と言ってもよい）という説に従うなら、これらは必ず階級性をおびている、と考えています。……ですから、すべてが超階級的で、文章日月のごとしという永遠の大文豪がいるなんて信じません」〔《三閑集》所収《文学の階級性》〕と述べている。これら科学的世界観、痛切な経験と緻密な論理によって書かれた「人間性」批判のことばは、疑いもなく正しく、過去のものとなってもいない。⁽⁴¹⁾

またある意見が主張するところでは、魯迅はたしかに梁実秋等の地主ブルジョア人間性と断固たる戦いを行い、文学の階級性と人間性の階級的内容に関する透徹した見解を数多く提起して、抽象的な普遍的人間性によってその階級性を覆いかくそうとする主張を、完膚なきまでに批判した。だが、共通の人間性の存在をけって否定してはおらず、そればかりか、共通の人間性を否定する意見に対して異なった見方を明確に示している。1928年7月、ある作者〔職工であった 愷良〕が魯迅先生に手紙を書いて、韓侍桁訳によるリンクエフ〔未詳〕の《文学上の個人性と階級性》なる一文の観点について質問してきた。魯迅先生は八月に書いた返信の中で、リンクエフのその一節には、有産者と無産者は「階級性」しかもたず、共通の人間性を「全く欠く」と述べてあるが、「断定が性急にすぎるようです」、「一部の作者は、階級意識

を明晰尖鋭にさせるために、けんめいに階級性説を強めています、その一方でたやすく人の誤解を招くのです」と指摘した。かれは続けて、中国の実際と結びつけて、唯物史観によって共通の人間性を「叱責する」やり方に対する不快感を示し、共通の人間性への否定を唯物史観として宣伝することに対する憂慮と反対を示し、「ところが中国にはその例があり、なんと個性、共通の人間性（すなわちリンクエフのいう個人性）、個人主義すなわち利己主義をすっかり混同して、唯物史観的であると思いこんだ叱責を加えたのです。このうえ誰かがこれを根拠にして唯物史観を論じたりしたら、もうそれこそめっちゃくちゃです」といい、さらに、正面から自分の見解を提示して、「わたし自身は、性格感情等々はすべて『経済に支配される』（経済組織にもとづく、あるいは経済組織に依存する、と言ってもよい）という説に従うなら、これらは必ずすべて階級性をおびている、と考えています。けれども『すべておびている』のであって、『しかもたない』のではありません」と述べている。⁽⁴²⁾

一部の同志は「人間性」が単に階級に帰結するだけではないという問題を論述した際、やはり魯迅先生がリンクエフの一節をめぐって述べたことばを取上げ、かつ、魯迅が「人間性」を階級性だけで解釈することに断固反対し、そういう解釈の歴史的原因とその一面性を明らかにし、階級性と区別される他の一面、すなわち超階級性あるいは「共通の人間性」を認めていたことは、きわめて明らかである、と説く。⁽⁴³⁾

8. さまざまな非プロレタリア人間性論を いかに扱うか

ある意見が主張するところでは、階級社会にあっては、プロレタリアートは人間の社会的関係の総和を集中的に反映しているがゆえに、まず階級性を主張し宣伝するが、同時に階級性によっては

概括しえない人間性があることをも認めるべきであり、しかも「人間性論」には断固反対しなくてはならない。なぜなら、階級社会にあっては、人間の思想は多く階級の烙印を押されて、人間性に階級的差違が生まれはじめるからである。ところが「人間性論」者はいつでも人間の階級性を抹殺し否定してしまう。地主ブルジョアジーの「人間性論」は、実質的には地主ブルジョアジーの階級性を唯一の人間性であると主張し、プロレタリアートと勤労人民の階級性が人間性であることを否定しているのである。⁽⁴⁴⁾

もうひとつの意見が主張するところでは、地主階級とブルジョア人間性論を混同して論じるのはまちがっている。地主階級の人間性論とブルジョア人間性論とは、その階級的内容と基本的特徴が異なっており、区別もしないで同列に論じるべきではない。ブルジョア人間性論の基本的特徴は、かれらが標榜する人間性を超歴史的、超階級的な普遍的で共通の人間の本質であると説くことである。地主階級の人間性論も同じく抽象的に人間性の善悪を語るものの、地主階級の階級的本質に規定されて、かれらは異なった等級の人間が異なった本性をもつことをより強調し、かつそれによってかれらの封建等級制度を弁護する。董仲舒〔漢代の儒家政治家〕の「性三品」説〔人間の本性を「聖人の性」「中民の性」「斗筭（小人）の性」に段階づけ、善悪に区分する考え方〕等がその例である。さらに留意すべきは、地主階級であれブルジョアジーであれ、この両階級がまだ上昇期にあった時期には、両階級の人間性論がいずれも一定の進歩的役割を果たしたことである。たとえばブルジョアジーの人間性論は、封建専制政体や封建主義的イデオロギーたる宗教神学との戦いの中で、重要で耳目をゆるがすような思想解放の役割を果たし、社会の前進を促進する進歩的役割を果たした。⁽⁴⁵⁾ もちろん、これら人間性論の消極的役割、ひいては反動的役割も無視してはならないが、批判の鋒先はできるだけ精確にむけなく

てはならない。たとえば、ブルジョアジーの人間性論の誤りは、人間性の存在を肯定するところにあるのでもなければ、その作品が人間性を描いたことにあるのでもなく、かれらが人間性の回復を社会の改良と道德の自己完成に託していることにある。エマソンの「博愛」観、ホイットマンの「民主」説、シラーの「平等は人類の神聖な法則である」への讃歌、ユーゴーの「自由の天使、光明の巨人」への讃美等は、いずれも宣伝を通じて人間性を呼び返し、社会の進歩を促進しようとはかった。したがって、かれらの理論と作品は、旧制度を批判し、搾取者が人民の財富のみか人民の天性をも奪い取っていることを批判する点では、一定の進歩性と革命性を持ち、人びとを鼓舞し激励する一面をもったのであるが、しかし具体的に実現する方法と道がまちがっていたため、ユートピア式の夢幻境に陥り、勤労人民に対して消極的影響を生じずにはすまなかった。⁽⁴⁶⁾

さらに別の意見が主張するところでは、完全なブルジョア人間性は存在せず、完全なプロレタリア人間性も存在しない。プロレタリアートが近代の人類史の発展過程で形成されたのに対し、「人間性」は少なくともすでに幾千年も存在している。人類は階級社会から無階級社会へ一足で入りこむことはできないし、ある朝突然、「人間性にみちた人類」への還帰を達成したと宣言することもできない。この中間にかならずある過程が必要であり、全人類についていえば、この過程とは階級性をたゆみなく解消してゆく過程であり、「共通の人間性」をたゆみなく確立してゆく過程である。この点を信じなければ、共産主義は実現できるものではない。このほか、われわれは次の点も認めなくてはならない。すなわち、プロレタリアートは道德、文化、芸術のうえで批判的継承という問題をになっているが、人間性問題においてもやはり批判的継承という問題をになっていることである。プロレタリアートはひとつの階級として形成

されるが、それと同時にブルジョア人間性と何らの共通項ももたないという人間性観まで形成できはしない。プロレタリアートは自らの階級が形成される以前の全歴史を切捨てても離脱もできはしない。ちょうど赤ん坊の身に父母にそなわったある生理的特徴を必ず見出すことができるのと同様である。プロレタリアートは人間性観のうえでも批判的継承の問題をになっているのであるから、ある程度まで多かれ少なかれブルジョア的な、さらには封建主義的でさえある人間性観の色彩を帯びることは避けられない。この意味から言えば、いわゆる「プロレタリアートの人間性」は、自階級の鮮明な痕跡をおびるうえに、他階級の下塗りの色までおびるべく定められているのである。⁽⁴⁷⁾

9. プロレタリア文学芸術は人間性問題に どう対処し、どう反映するべきか

ある意見が主張するところでは、階級社会には抽象的な、共通の人間性などなく、階級性が現段階における人間性にはかならない。したがって、プロレタリアートの文学作品は「人間性論」者が作りだした「人間性」、および「人間性」と階級性との戦いを描くべきではなく、全力をあげてプロレタリアートの階級性——人類の社会が今日まで発展してきた最高級の人間性——を表現すべきである。⁽⁴⁸⁾ 全国人民と「四人組」との戦いは魂魄をゆるがす階級闘争であり、これこそ二つの階級の人間性闘争ではないか。「四人組」の粉碎後、おびただしい文学芸術作品が林彪、「四人組」一派のファッショ的人間性を暴露し批判し、「四人組」と断固戦ったプロレタリア英雄の美しい人間性、換言すればプロレタリアートの党派性、共産主義的人間性を賞賛し鼓吹した。試みにたずねるが、革命と反革命との階級闘争を書かず、革命的階級と反革命的階級との人間性闘争を書かないとしたら、プロレタリア英雄たちと「四人組」との「共通の人間性」を書けばよいのだろうか。革命

的文学芸術家はかの反動的人間性を暴露し批判し、プロレタリアートの人間性すなわちプロレタリアートの党派性、共産主義的人間性によって、人民を教育し、全人類を改造し、人類の魂の技師に課せられた光栄ある任務を真にになわなくてはならないのである。⁽⁴⁹⁾

ある意見が主張するところでは、文学芸術は単に階級性を反映するに限定されてはならない。われわれの社会主義文学芸術は、血の通った、生き生きとして人を打つ芸術形象を造形して、全面的かつ真実に、豊かな人類の社会生活を反映し、さまざまな社会的関係における人びとの本質を反映すべきであって、「四人組」が鼓吹したように、ひとりの人間の階級性だけを見据えて、それ以外は一切知らぬ顔というようであってはならない。芸術作品における例の階級性しかもたない「模範人間〔文革期の模範劇の人物を揶揄した呼称〕」、「過半人間〔人間的に欠ける所があるゆえに一人前の人間とはいえぬとの揶揄的呼称〕」は、観念論的な作り物にすぎない。われわれは必ずその逆の道を歩み、できるかぎり人間性の美、人間的性情の美の全体を表現し、われわれの信仰、情操、道徳、能力を真実に、科学的に表現しなければならない。⁽⁵⁰⁾

もうひとつの意見は、人間の社会性、階級性および自然本性を反映してよいと、はっきり述べている。かれらの考えでは、いかなる事物であれ多方面にわたる要素から構成されているのであり、社会の鏡たる文学は客観的にそのすべてを反映し、すべてを描くべきなのである。人間の社会性、階級性は描かれるべきであり、人間の自然本性もまた描かれるべきである。かつて愛情を文学の永遠のテーマとみなした人がいた。この命題は完全に正しいとはいえないものの、合理的要素も含んでいる。自然本性が求めるものとしては、愛情は永遠であり、社会属性が求めるものとしては、愛情は永遠ではなく、しかも両者の間にはしばし

ば衝突がおこる。いくつかの古典文学作品に反映された、異なった階級に属する男女の間の愛情生活がかもし出す悲劇は、この衝突の現れにはかならない。事物の多くの要素を単純化、単一化する結果は、文学上の公式化・概念化をもたらして、文学の生命力を扼殺してしまうのである。⁽⁵¹⁾

さらに別の意見はもう一步進んでこう考える。文学が人間を対象とするいじょう、当然、人間性にもとづかなくてはいけない。人間性を離れては、人の興味を引きにくいばかりでなく、人びとが理解するすべもない。異なった時代、異なった民族、異なった階級から生み出された傑作が、なぜ全人類に好まれるかといえ、その原因は普遍的人間性が共通の土台となっているからである。プロレタリア文学芸術は人に影響を与え、人を教育するのが目的であるから、人間性を強め、高めなくてはならないのである。⁽⁵²⁾

1980年9月

〔使用文献一覧〕

- (1)(10)(13) 巴人《論人情》，《新港》1957年1月号。
- (2) 徐懋庸《過了時的紀念》，《文匯報》1957年6月7日。
- (3)(6) 王淑明《論人性与人情》，《新港》1957年7月号
- (4) 張学新《“人情論”還是人性論》，《新港》1957年3月号；張国民，黃炳《批判王淑明同志的人性論》，《文学評論》1960年第2期。
- (5) 巴人，徐懋庸論文に見える。
- (7) 蔡儀《人性論批判》，《文学評論》1960年第4期；王燎熒《人性論的一個“新”標本》，《文学評論》1960年第4期；馬文兵《在“人性”問題上兩種世界觀的鬭爭》，《文芸報》1960年第12期。
- (8) 王淑明《關於人性問題的筆記》，《文学評論》1960年第3期。
- (9) 蔡儀論文および潔泯《論“人類本性的人道主義”》，《文学評論》1960年第1期。
- (11)(15) 錢谷融《論“文学是人学”》，《文芸月報》1957年5月号。
- (12) 張学新論文に見える。
- (14) 張国民，黃炳論文に見える。
- (16) 朱光潛《關於人性，人道主義，人情味和共同美的問題》，《文芸研究》1979年第3期。
- (17) 王元化《人性札記》，《上海文学》1980年3月号；徐梅芬《上海師範学院学報》（社会科学版）1980年第3期。
- (18) 丁松齡《慢談人性》，《浙江師範学院学報》（社会科学版）1980年第1期；陸榮椿《也談文芸与人性論，人道主義問題——兼与朱光潛同志商榷》，《社会科学輯刊》1980年第3期。
- (19) 胡義成《人・人性・人情》，《社会科学》1980年第1期；朱晶，付樹声《論人性与文藝的解放》，《文学論稿》1980年第1輯；王永昌《淺談人性与階級性的關係》，《浙江師範学院学報》（社会科学版）1980年第1期。
- (20) 顧驥《人性与階級性》，《文芸研究》1980年第3期；劉敏中《論人的本質和文学——兼談〈關於文学的階級性〉》，《學習与探索》1979年第5期。
- (21) 丁松齡，徐梅芬の論文に見える。
- (22) 尹繼佐，黃万盛《人性是抽象和具体的弁証統一》，《上海師範学院学報》（社会科学版）1980年第2期。
- (23)(30)(51) 王潤生《人的自然性，社会性和階級性》，《遼寧大学学報》1980年第3期。
- (24) 朱晶，付樹声論文に見える。
- (25) 朱汝瞳《有超階級的人性嗎？》，《東海》1979年第2期；胡繩生，袁杏珠《也談人性和階級性——与王磊同志商榷》，《遼寧大学学報》（社会科学版）1979年第6期。
- (26)(33)(43)(50) 胡義成論文に見える。
- (27)(36) 王淑明《人性，文学及其他》，《文学評論》1980年第5期。

- (28) 黄葉眠《關於文学中的人性，階級性等問題試探》，《文芸研究》1980年第1期；陳劍雨論文〔《電影中的人性和人情》〕，《電影芸術》1980年第5期。
- (29) 顧驥論文に見える。
- (31) 胡義成，顧驥の論文および張毓文《在階級社会里，人性都帶階級性，而非只有階級性》，《浙江師範学院学报》（社会科学版）1980年第1期。
- (32) 王永昌論文および計永佑《兩種对立的人性觀》，《文芸研究》1980年第3期。
- (34) 王元化論文に見える。
- (35) 顧驥論文および程代熙《人学・人性・文学》，《光明日報》1980年1月9日。
- (37) 丁松齡，陸榮椿の論文および陳象成《人性，共性，差異性》，《寧波師專学报》1980年第1期。
- (38) 胡義成，王淑明の論文に見える。
- (39)(44) 鄭祖傑《発乎情，止乎礼義——談帶着階級性的人性》，《東海》1979年第8期。
- (40)(42) 陳劍雨《電影中的人性和人情》，《電影芸術》1980年第5期。
- (41) 陸榮椿論文に見える。
- (45) 薛德震《關於人性論的對話》，《讀書》1980年第1期。
- (46) 李遵進《試談人性的相对独立性》，《東海》1980年第2期。
- (47) 梁曉声《淺談“共同人性”和“超階級的人性”》，《電影芸術》1980年第9期。
- (48) 胡繩生等の論文に見える。
- (49) 丁松齡論文に見える。
- (52) 錢谷融《〈論“文学是人学”〉一文的自我批判提綱》，《文芸研究》1980年第3期。

＊原題「三十年人性論争の情況(資料)」

『文学評論』1981年第1期

訳者付記

映画〈苦恋〉の問題提起に端を発して，脚本作者白樺への批判が高まっているいま，他に議論を呼んだ作品のひとつに雨煤作〈啊，人……〉（《花溪》1980年第10期）がある。貧農の娘が家族を救うため地主に身を売って妾になった後，地主の息子を知って愛に目覚め，地主の死後，その息子と結婚を約束するが，解放を迎えて，二人は別々に改造の道を歩むことになり，文革期には闘争対象とされて，それぞれに苦悩の日々を送った後，新たな解放を迎えて二人とも「地主」の区分をはずされ，30年後にしてようやく結ばれるに到る物語で，具体的作品を通じて人間性問題に一石を投じた。もと地主の側の人物の愛情を描き，かれらに肯定すべき人間性を認めて，固定した階級的觀點をのりこえ，「母」と「息子」の間の愛を肯定的に描いて封建倫理の枠を破っており，こういう

作品が発表されたことに，作者のみならず文芸界の旧来の禁區を踏みこえようとする姿勢が示されている。

この作品に対してはただちに反響が出て，作者の大胆な試みを積極的に支持し，人間性の復活をうたった作品の意義を評価する見解がある一方，人間の社会属性を忘れて自然属性のみを強調しており，この愛は人倫を乱す禽獣の愛であって，普遍的人間性とは無縁であるとして全面的に否定する見解もある。（小生は支持する見解に組したい）。賛否いずれの見解にもマルクスの言葉が引かれ，その解釈の差，具体的作品への適用の差が目立つ。直接人間性問題にふれる作品の一例として紹介しておく。問題を含んだ作品が芽を踏みくだかれることなく，理論の深まりに資することを望みたい。

（すぎもと たつお・早稲田大学教授）